ペドロ・アルモドバル『セクシリア』の
精神分析的解釈の試み

伊 集 院　　敬　　行

2023年 3 月

島根大学法文学部紀要言語文化学科編　島大言語文化　第54号　抜刷

島根大学法文学部

ペドロ・アルモドバル『セクシリア』の精神分析的解釈の試み

伊集院　敬　行

はじめに

倒錯的な性とそれによって結びつく家族。それはアルモドバル（Pedro Almodóvar，1949-）の映画にしばしば見られるもので，彼のトレードマークの一つと言ってよい。フロイト（Sigmund Freud，1856-1939）によれば，「倒錯」（perversion）とは性対象（性的な魅力を発揮するもの）や性目標（性欲動によって引き起こされる行動）の逸脱である。周知のようにフロイトは「エディプス・コンプレクス」と「去勢」の語を用い，人間の性自認が幼児期の両親への愛憎の感情から生じることを論じた。この考えに従うなら，そうして形成される人間の性は，時期が来れば本能によって自然に発現する動物の性のようにはいかず，それゆえそこにはさまざまな逸脱が起こることになる。フロイトはこの逸脱を倒錯と呼ぶ。（したがってフロイトにとって倒錯は正常の対立概念ではなく，必ずしも治療すべき異常や病気といったものではない。倒錯は少なからず誰にでもあるもので，「正常」もいわゆる標準・平均という意味にすぎない[1]）。

では，このような倒錯の説明はアルモドバル映画に当てはまるだろうか。フロイトが倒錯とするものは長編第一作の『ペピ・ルシ・ボンとその他大勢の娘たち』（*Pepi, Luci, Bom y otras chicas del montón* (*Pepi, Luci, Bom and Other Girls like Mom*), 1980）にすでに見られる。劇中，夫に満足できないマゾヒストの主婦ルシは，ボンという少女とサド・マゾ的な同性愛関係になる。だが，家を出たルシに腹を立てた夫の暴力により，彼女は彼への愛を取り戻す。そしてルシと別れたボンはペピとホモセクシュアル（レズビアン）の関係となり，映画は幕を閉じる。このように『ペピ・ルシ・ボン』の登場人物の多くは，サディスト，マゾヒスト，同性愛者といった倒錯者である。では，『ペピ・ルシ・ボン』には子が両親との間に取り結ぶ性的な関係に当たるものは描かれているだろうか。

一見する限り，『ペピ・ルシ・ボン』にはそのようなものは描かれていない。

確かにペピと彼女の父親（電話でしか登場しない）の間には確執があるらしい。また，劇終盤のペピがボンのために料理する姿には，母子関係を見ることもできる[2]。とはいえ，これらはややもすると見逃してしまう程度にしか描かれておらず，もしこれらの場面を重視できるとすれば，それは我々がすでにその後のアルモドバルの作品の主題に家族があることを知っているからだろう。

しかし，続く『セクシリア』（*Laberinto de pasiones* (*Labyrinth of Passion*), 1982）では，二人の主人公の倒錯の原因とその治癒が作品のメイン・テーマになっている。主人公セクシリアはニンフォマニア（色情狂）で光恐怖症である。もう一人の主人公ティラン皇帝の息子リサはゲイである。そして劇中，セクシリアの倒錯の原因を明らかにするのが，ラカン派精神科医スサーナである。スサーナはその精神分析で，セクシリアのニンフォマニアと光恐怖症の原因が彼女の父親コンプレクスにあり，その始まりがある夏の日の浜辺での出来事であることをセクシリアに気づかせる[3]。リサはその思い出の登場人物のひとりであり，彼らの倒錯や症状はこのときの出来事が原因であった。スサーナの診察により，セクシリアがそれを思い出すと，その記憶の抑圧によって形成された彼女の光恐怖症は消失する。

だが，スサーナの分析はセクシリアの倒錯の原因を明らかにしてはいても，それによって治癒したのはセクシリアの光恐怖症だけである。物語上，二人の倒錯に治癒をもたらしたのはあくまで二人の「恋」である。ここでは恋によりニンフォマニアがうぶな娘になり，同性愛者が異性愛者になる。そして愛しあった二人はついに飛行機の中で結ばれ，「正常」なカップルとなる。では，なぜ恋は二人の倒錯に治癒をもたらしたのだろうか。

この問いに答えるべく本稿は，まずフロイトの正常と倒錯の理解を確認し（2章），本作で恋が治療効果を持った理由を精神分析的に考察する。（3章，4章）。これにより本作の戯画的な精神分析の描写が，実はその深い理解に基づくものであることが分かるだろう。そしてこの考察を踏まえ本稿は，『セクシリア』における主人公たちの倒錯とその治癒という筋書きが，セクシリアの父ペニャ博士の無性生殖の研究と脇役ケティへの実父によるレイプというエピソードに，それぞれ異なる意味で対比されていること，そしてこれらの仕掛けが，スペインの歴史的なトラウマ（スペイン内戦とそれに続くフランコの支配）を浮かび上がらせ，同時にその治癒を願うものであることを明らかにする（5章，結びに）。

1. あらすじ

考察に先だち，本作のあらすじを確認しよう。

ニンフォマニアで光恐怖症であるセクシリアは，その治療のためにラカン派精神分析家スサーナのもとに通っている。だが，セクシリアにはそれを真剣に治療する気などない。セクシリアはバンド活動に明け暮れる毎日を送りながら，今日もマドリッドの繁華街で男漁りをしていた。一方ちょうどそこには，セクシリアのかつての初恋の相手，ティラン皇帝の息子リサもいた。リサはゲイで，彼もまたそこで男漁りをしていたのである。そんなある日，ナンパした相手が自国の留学生であることを知ったリサは，慌てて彼のアパート（テロリストのアジト）を飛びだす。実はティラン皇帝はその圧政のせいで命を狙われてコンタドーラ島に亡命しており，そのため今はリサがテロリストの標的になっていた。そこでリサはかつてのナンパ相手（モデル，スタイリスト，歌手）のもとに駆け込み，自分の変装を依頼する。変装の仕上がりに安心したリサはロックのライブ会場に行くと，ひょんなことからあるバンドのボーカルとなり，これがきっかけとなって彼はセクシリアと再会する。そして，自分たちが同じ過去を持っていることを知らないまま，二人は恋に落ちる。この恋は二人を大きく変えたらしく，それまで享楽的な性愛にふけっていたセクシリアとリサはプラトニックに愛し合う。だが，そんな二人にティラン皇帝の元妃トラヤが絡んでくる。かつての栄光を取り戻したいトラヤは，皇帝の子を産むべく，セクシリアの父でクローン技術の研究に没頭する産婦人科医のペニャ博士のもとに不妊治療に通っていた。しかし，義理の息子リサがスペインにいることを知ったトラヤは，リサとの間に子を作ることに目標を変える。トラヤはリサを誘惑し，リサはトラヤと初めての女性を経験してしまう。そこにセクシリアがリサを訪ねにやってくる。トラヤと鉢合わせしたセクシリアは，トラヤに食って掛かると，トラヤはそんなセクシリアに鏡で光を浴びせる（冒頭でペニャ博士は，セクシリアが光恐怖症を治療するために精神分析に通っていることをトラヤに話している）。するとセクシリアは光恐怖症を発症し，そこから逃げるようにしてスサーナの診療所に駆け込む。そしてスサーナの分析でリサとの過去の記憶を取り戻し，光恐怖症を克服したセクシリアは，リサと仲直りし，彼とともにスペインを去るべく，かねがね抱いていた企み――すなわち自分のファンであるケティを自分そっくりに整形手術することで自分の替え玉にする――を実行する。実はケティもこの計画に乗り気であった。というのも

ケティは，母が浮気をして家を出ていったせいでおかしくなった父に二日おきに犯される生活にうんざりしており，また，セクシリアの父に一目惚れしてもいたからであった。手術が終わり，ケティがセクシリアに成りすますと，彼女はセクシリアの父を誘惑し，本物のセクシリアはリサと共に空港を目指す。道中，セクシリアとリサはテロリストとトラヤに追いかけらながらも，無事に飛行機に乗り，その中でついに二人は結ばれるのであった。

2. 倒錯について

『セクシリア』は，民主化直後のマドリッドの享楽的な若者文化を背景に，主人公たちが次々と荒唐無稽な出来事を引き起こすコメディ映画である。物語の展開は御都合主義であるが，コミカルな作風のおかげでそのことはさほど気にならない。なにより『セクシリア』にはスペインの民主化の解放感から生じるエネルギーに溢れていて，これにより些細な矛盾など吹き飛んでしまう。だが，だからと言って本作にしっかりとした骨格がないわけではない。それは『ペピ・ルシ・ボン』では十分に描かれなかった主人公たちの倒錯とその治癒であり，それをもたらす二人の恋と精神分析である。

もちろん，本作で描かれる精神分析は戯画的なものである。たとえば，「奇遇だね」というペニャ博士にスサーナが「偶然ではない」と答えたり（言うまでもなく精神分析は偶然に無意識の現れを見る），彼女が患者に薬を与えたりするのは精神分析家にはありえないことであるが，悪びれずにそうするスサーナの様子に我々は思わず笑ってしまうだろう。ただし，戯画的に描かれているからと言って，本作が精神分析を否定していると考えてはならない。パロディがパロディたりうるのは，それが批判対象に対する深い理解や共感を示しているからである（そうでなければそれはただの悪意である）。では，本作の精神分析への言及が単にそれを揶揄したり，嫌悪したりするものでないのなら，アルモドバルは『セクシリア』で倒錯とその治癒を描くことで，一体何を目論んでいたのだろうか。

この問いに答えるには，フロイトの言う倒錯がどのようなものかを理解しておく必要がある。動物と違って我々人間は，しばしば性器以外の物や部位に性的に興奮し，生殖に結びつかない性行為に夢中になる。フロイトによれば，「同性愛」は性対象の倒錯とされ，「フェティシズム」や「覗き」，「サディズム」や「マゾヒスム」は性目標の倒錯とされる（言うまでもなくこれらはすべてア

ルモドバル映画ではお馴染みのものである)。では，どのようにして人は倒錯者になるのだろうか。

はじめにフロイトが「正常な発達」における性対象，性目標がどのようなものと考えたのかを確認し，次に倒錯ではそれらがどのようにして正常から逸脱するのかを確認しよう。

まず，男児の正常な発達を確認しよう。父の登場により，母の欲望が父に向っていることに気づいた男児はそのエディプス的願望――「父を亡き者にし，母を娶る」――を抱くようになる。だが，同時にそのような願望を抱いたせいで父に去勢されるという不安を覚えると，男児は自体愛の対象であるペニスを守るべく，そのエディプス的願望を抑圧する。たとえば，それまで躾のための単なる脅しと思っていた去勢の威嚇が，男女の解剖学的違いを知ったことで（女性器や両親の性行為を見たことで）現実味を帯びると，男児は去勢されるのを恐れ（男児の去勢コンプレクスとしての去勢不安），そのエディプス的願望を抑圧する。ただしそれは母と愛し合うことを完全に放棄するものではない。未来にその願望を叶えるべく，男児は父親への同一化を進め，小さな父となる（エディプス・コンプレクスの抑圧・克服）[4]。

次に女児の正常な発達を確認しよう。自分にペニスがないことに気づいた女児は，すでに去勢されていることを恥じ，また，自分をそのように生んだ母を憎む。そしてそれまで母に向けていた愛情を父に向けることで女児は，父にペニスを，次いでその代理物としての赤子を与えてもらおうとする（女児の去勢のコンプレクスとしてのペニス羨望と，それによるエディプス・コンプレクスの形成）[5]。

このようにエディプス期において去勢というトラウマ的な現実（心的現実）に直面すると，男児も女児もその現実性を受け入れるべく，それまで切れ目なく結びついていた母と自分を区別し，自身の性を決定し，異性の親を他者として愛し，両親との関係を構築していくという困難を経験する[6]。そしてこれが，倒錯的[7]だった幼児の欲動充足を正常なものにする準備となる。それまで口唇，肛門，男根といった自己の身体の部分の愛撫（自体愛，オートエロティシズム）により倒錯的に充足されていた幼児の欲動は，エディプス期に異性の親に向くと，これが異性の他者との性器結合によってその充足を目指す思春期の性の目覚めを準備する。

しかし，去勢の現実性を受け入れる（男児はエディプス・コンプレクスの抑

圧・克服，女児はエディプス・コンプレクスの形成）のではなく，去勢の現実性を拒否し，あくまで母に留まるという道もある。これが去勢の否認（denial, disavowal）[8]である。そしてこの否認のための手段が「倒錯」である[9]。

では倒錯ではどのように去勢が否認されるのだろうか。性対象の倒錯を見てみよう。たとえば「フェティシズム」や「窃視症」は，女性にペニスがないことを見なかったことにすることで生じる（そのためフェティシズムや窃視症は去勢に怯える男性に多い）。自分が見たある光景を見なかったことにするには，それをそれとは別の何かで覆い隠せばよい。そこでフェティシズムでは，倒錯者はあるべき母のペニスの代理，もしくは母のペニスの欠如を隠すものとしてフェティッシュ（足，ハイヒール，下着など）を選ぶ。また，「窃視症」では，倒錯者はあるはずの母のペニスを探そうと覗き見する[10]。

次に性目標の倒錯の一つ「同性愛」を見てみよう。ただし，その原因はさまざまである。たとえば女児の場合，同性愛は，女児が母への愛情を父に向け直すことなく，そのまま母に向け続けることで女性を性対象にしたり，母親との関係の悪い女児が同一化すべき女性像を見出せないで，成人しても母親像を求めて女性に性的関心を持ったりすることで生じる（註５も参照）。一方，男児の場合，同性愛は，男児が母に過剰に同一化することで，母が自分を愛するように自分の似た者を愛したり[11]，父親の威厳が強すぎ，また母親との関係に不満が強い男児が，父親に愛されるために女性に同一化したりすることで生じる[12]。

3. セクシリアの倒錯

では，『セクシリア』におけるセクシリアとリサの倒錯はどうだろうか。セクシリアの症状はニンフォマニアという倒錯と光恐怖症である。劇前半の精神分析の診察（セッション）ですでにスサーナは，その原因がセクシリアの父親コンプレクスであることを見抜いており，劇終盤の診察でセクシリアはようやくこれを自覚する。最後の診察でセクシリアが思い出した記憶に彼女の父親コンプレクスを確認しよう。

ある夏の日の砂浜，思春期に入ったばかりの少女だったセクシリアは，ほのかな恋心を抱いていた同じ年頃のティラン帝国の王子リサとお医者さんごっこにも似た砂遊びをしていた。そこにリサの義母トラヤがやってきて，砂の中に埋められたセクシリアに砂をかけると，彼女が戸惑っている隙にリサを連れ

去ってしまう。ティラン皇帝の愛を失っていたトラヤは義理の息子を誘惑することで皇帝の血筋の子を産もうとしていたのであった。リサが連れ去られたことを父ペニャ博士に訴えるセクシリア。だが，そのときティラン皇帝に招かれてそこに向かっている途中のペニャ博士は，セクシリアの訴えに取り合わない。セクシリアはペニャ博士を自分のほうに引っ張ろうとするが，ペニャ博士は彼女の手を振りほどく。すると，勢い余ってセクシリアは砂浜に倒れてしまう。そのとき，ぎらぎらとかがやく真夏の「スペインの太陽」がセクシリアの眼に飛び込んでくる。そして父に拒絶されたことで傷ついたセクシリアが一人砂浜を歩いていると，そこに少年たちが現れ，セクシリアを「夫婦ごっこ」に誘う。そしてセクシリアは傷ついた心を紛らわすためか，その誘いを受け入れてしまう。

以上がスサーナの分析でセクシリアが思い出した記憶である。この思い出に見るように，セクシリアの光恐怖症とニンフォマニアの原因には彼女の満たされなかった父への愛情がある。セクシリアの中で父に嫌われたショックと太陽の光が結びつき，光恐怖症が形成される。そしてこのとき，自分の愛情を拒絶した父への腹いせにした少年たちとの初体験が，セクシリアをニンフォマニアにした。

また，このようなセクシリアの思い出は，現実の彼女の経験としてだけでなく，幼児としての彼女を表象するものとしても解釈できるだろう。お医者さんごっこにも似た砂遊びをしていたのは，幼児が解剖学的性差に気づくこと，そのとき砂の中のセクシリアから「空気を入れるための穴をあけて」と乞われたリサが，彼女の股のあたりの砂に穴をあけるのは，去勢の比喩として解釈できる。そしてこの解釈はトラヤがセクシリアの顔に砂をかけたことによって裏打ちされる。というのも，砂をかけて目潰しするのは，フロイトがオイディプス王が自ら目を潰したことを去勢として理解したことはもちろん，「不気味なもの」（1919）でフロイトが去勢を象徴しているものとして取り上げた，ホフマン（Ernst Theodor Amadeus Hoffmann，1776-1882）の『砂男』（1817）で乳母が幼少の頃の主人公ナタナエルを早く寝かすために語った砂男の物語――夜寝ない子供の眼玉に砂をかけることで目玉を飛び出させ，それを巣に持ち帰って子供の餌にする妖怪――を思い出させるからである[13]。

ところで男児にとって父は去勢を執行する者として思い描かれるが，このことは女児の正常な発達には当てはまらない。女児にとって去勢はすでに起こっ

たことであり，娘をそのように産んだのは母なのだから，女児にとっては母こそが彼女を去勢した者ということになる。したがって，女児にとって父は，去勢を執行する者ではなく，むしろ彼女にペニスを与えてくれる者として現れる。

このことからセクシリアを女児，トラヤを母だとすると，セクシリアがトラヤにリサを取られたことをペニャ博士に訴えることは，女児が母に与えてもらえなかったペニスを父に与えてもらおうとすることに対応する。この場合，セクシリアにとってリサは女児が欲するペニスとしてある。だが，ペニャ博士はセクシリアのエディプス的願望を拒絶し，これが彼女の父親への異常な執着とその症状としてのニンフォマニアを形成したと解釈できる[14]。

このようにセクシリアは，典型的な女児のエディプスのプロセスを歩んでいたにもかかわらず，父からの愛情の欠如のせいで，ニンフォマニアと光恐怖症になった少女である。しかし，リサと偶然に再会したセクシリアは，そうとは知らず恋に落ち，この恋によりニンフォマニアという倒錯は正常化される。

では，なぜ恋はセクリシアのニンフォマニアを治したのだろうか。もちろん，その理由は物語上説明されない。しかし，精神分析的視点から見れば，セクシリアがリサと恋に落ちたことでニンフォマニアを克服したことは，思春期による性愛の再編を意味すると思われる。

幼児期の嵐のような心的葛藤は，エディプス・コンプレクスの克服や形成によっていったん沈静化する（潜伏期）。しかし，思春期に入り，第二次性徴とともにリビドーの動きが活発になると，これがエディプス・コンプレクスを刺激する。したがって思春期とは，幼児期の心的葛藤の再演・再体験ということになる。だが，そのころにまでには男児も女児も異性の親への愛情に一定の折り合いをつけ，その愛情の対象を他者（同世代の異性）へと向けるようになる。

この説明はまさにセクシリアに当てはまる。劇中ではセクシリアは成人している女性であるが，彼女を思春期の少女として見れば，リサとの恋が彼女のニンフォマニアを治癒したことは，思春期になり少女が他者を愛することを知ったことで，父への歪んだ愛情から生じた彼女の倒錯が解消したことを表している。

4. リサの倒錯

次にリサの倒錯を確認しよう。その原因もセクシリアの夢に伺うことができるトラヤの誘惑から逃れてセクシリアの元に戻ったリサが見たのは，彼女が少

年たちと「夫婦ごっこ」をするところであった。それにショックを受けたリサは茫然と立ち尽くす。すると少年たちの一人が立ち上がり，彼を慰めるように茂みの中へと導いていく。どうやら，義母の誘惑を断ち切って愛を向けた少女に裏切られたことと，そのときリサを慰めたのが少年だったことが相まって，彼のセクシュアリティはホモセクシュアルになったらしい。とすれば，物語上，リサがホモセクシュアルになった原因は，いわゆる「女性不信」ということになる。

だが，セクシリアの思い出の分析でしたように，このようなリサの思い出を現実の彼の経験としてだけでなく，幼児としての彼の経験を表象するものとしても解釈できる。そこで，まずリサを男児として，トラヤを母として解釈してみよう。すると，浜辺の草むらでトラヤが義理の息子を誘惑しようとするのは母子相姦の願望の表象，そんなトラヤからリサが逃げ出そうとするのは，子が母への欲望を抑圧することと理解できる。しかしこの場合，セクシリアは何を表象しているのだろうか。どうやらこの解釈は上手くいかない。

そこで今度はリサが男児なのはそのままに，トラヤを父として（劇中，トラヤは男装してマドリッドのハッテン場にリサを探しに行くことから，彼女は父と母を圧縮して表現していると言える。註14参照），リサが楽しく遊ぶセクシリアを母として解釈してみよう。すると，このときリサがトラヤに手を引かれ，無理やりセクシリアと引き離されるのは，父によって子が母から切り離されたことにあたる。そしてセクシリアが少年たちに身を差し出したのを見たことにショックを受けたリサは，母が自分ではなく父のほうを向いていることに気づいた幼児である。つまり，幼児としてのリサにとってこの浜辺の出来事は，父が子が母を欲望することを防げること，すなわち去勢を意味する。そしてそうだとすれば，男児の正常な発達の場合，このあとには去勢の受け入れ（エディプス的願望の抑圧・克服）が描かれることが期待される。

しかし，どうやらリサが表象する幼児はそうしなかったようである。このときリサが少年たち（父）に身を差し出すセクシリア（母）を見てショックを受けたことと，そんなリサを慰めに来た少年のひとり（父）に彼がついていくことは，幼児が母に失望し，父に愛されようと女性化することを表していると思われる。また，劇中，そんなリサが愛する男性が女性的な美少年であることは，母に愛されたいという願望ゆえに，母の立場から自分を愛するようになった男児を表していると思われる。なお劇中，リサが行きずりの関係を持つアン

トニオ・バンデラス演じるサデクは，彼が自国の女性の伝統的な衣装を身に纏った姿の写真を部屋に飾っているように，本作では繊細な美少年として描かれている。また，リサが性的関係を持つバンド仲間も美少年である。ここではリサは，母の立場から美しい自分に恋している幼児である（したがってここにはホモセクシュアルらしいナルシシズムも見ることができる）。

しかし，思春期のリビドーの活性化は少年少女に幼児期の再演・再体験をもたらし，これがそれまで倒錯的だった彼らの性を正常にする。リサの場合もそうである。二人が結ばれる前にリサが義母のトラヤ（ここではトラヤは父ではなく，母を意味する）と結ばれるのは，リサが男児のエディプスの道のりを歩み出したこと意味している。そしてラストでリサがセクシリア（リサにとってセクシリアは，ある夏の浜辺の思い出の中で母を表象していた少女その人であった）と愛し合うのは，倒錯的だった幼児の性愛が思春期に正常化していくことを表している。

5. 無性生殖と愛

ここまで主人公たちの性愛が，幼児とその両親との性的関係を反復するようにしてあることを確認した。だが，本作では性をめぐる幼児の苦悩とは原理的に無関係なものも描かれる。それはティラン皇帝が関心を寄せる，セクシリアの父ペニャ博士のクローン技術，無性生殖医療である。

冒頭，ペニャ博士は彼の診察を受けに来たトラヤに, 15年前のヴァカンスで彼女の元夫ティラン皇帝に偶然に出会ったという思い出を語る。そのとき皇帝から「自分の国の半分の国民に自分の血を継がせたい」と相談されたペニャ博士は,「技術的にそれは可能だ」と答える。このティラン（tyrannyの国の意だろう）は中東のどこかにある架空の独裁国家である。しかし，現在その皇帝は，彼の圧政に耐え兼ねた人々が起こした反乱のために，コンタドーラ（パナマにある島）に亡命中である。

ところでスペインの人々にとって独裁といえば，すぐにフランコ（Francisco Franco，1892-1975）が連想されるだろう。スペインは1975年11月20日のフランコの死後に民主化されるが，1982年の映画公開時は，その記憶がまだまだ生々しく人々の記憶にあったことは想像に難くない。このことから，ティラン皇帝はフランコの比喩であり，無性生殖技術で国民の半分に自分の血を継がせるという皇帝の発言が，自国の男を全部自分の分身に置き換えることを意味するな

ら，この発言は，政治を思うままにしたいという為政者の願望を表していると思われる。そしてこのように考えるなら，ペニャ博士の無性生殖技術で生まれた鳴かないインコ（劇中，鳴かないインコはクローンの失敗とされ，ペニャ博士はインコが鳴くのを待ち望んでいる）は，政治に対して声を上げない従順な国民の比喩である。またそうだとすれば，セクシリアの姿に整形したケティにピトペンスなる性欲亢進剤を飲まされたクローン・インコが鳴きだすのは，国民が圧政に立ち向かうことを意味するだろう。だがそれに加え，この鳴かないインコが鳴きだすというエピソードには，アルモドバルが「性」と「家族」を，国家や国民が経験したトラウマ的歴史を乗り越える力として考えていることも伺える。

すでに見たように，最初倒錯的だった幼児の性愛は，去勢の現実性の受け入れというトラウマ的な経験を通して正常化されていく。とすれば無性生殖で生まれる者にはエディプス・コンプレクスも去勢もない。そしてこのことこそ，クローン・インコが鳴かない理由である。というのも，ラカン（Jacques Lacan，1901-1981）が論じるように，去勢不安を克服するために母への欲望を抑圧するとき，幼児はその代わりに言語を得て「語る主体」（sujet parlant）になるからである。したがってもし性と言葉が深く関わるなら，無性生殖ではエディプス・コンプレクスも去勢不安も経験できないのだから，そうして生まれた者に言語獲得の機会はない。鳴かないクローン・インコ。それは言語を獲得できない幼児の比喩に他ならない。

しかし，たとえクローンとして生まれたとしても，性欲動に突き動かされて去勢やエディプス・コンプレクスを経験するなら，人は言葉を獲得できるだろう。ケティによりピトペンスを与えられたことで，それまで鳴かなかったインコが鳴き始める。そしてこのピトペンスはペニャ博士にも大きな変化をもたらす。

それまで性を嫌悪し，無性生殖の研究に没頭していたペニャ博士であったが，ケティがお茶にピトペンスを入れたせいで性に目覚める。そして，セクシリアの姿をしたケティとセックスし，スサーナから掛かってきた電話に「性の重要性を知った」と答える。もちろん，このペニャ博士とケティのセックスは，物語上は他人同士のセックスである。だが，視覚上は父と娘の近親相姦である。だから，もし，ペニャ博士が男児を表しているのなら，彼が性を嫌悪していたことは幼児がまだ性差に気づいていないことであり，娘の姿をしたケ

ティとセックスしたことは男児の近親相姦的願望として解釈できるだろう。性欲亢進剤は，鳴かないインコを鳴かせ，無性生殖を夢見るペニャ博士をケティとカップルにする（無性から有性へ）。それは子が性を知ることを意味すると同時に，それまで声を奪われ，フランコのクローンとしてあったスペインの人々が，自由な性を祝福することによって覚醒し，新しい家族としての国家を構築するというアルモドバルの希望を表している。

性が言葉を子に与えるように，『セクシリア』では性は政治を動かす力を人々に与えている。そしてそうだとすれば，『セクシリア』に見られる快楽主義と，倒錯者が正常になるその結末は一見矛盾するように見えるとしても，その矛盾はそれほど重大ではないだろう。『セクシリア』でアルモドバルは，倒錯を治癒されるべきものとは考えていない。本稿で論じたように，本作が描いているのは幼児の性自認のプロセスの困難であり，これがスペインの歴史と重ね合わせられている。したがって本作で問題になっているのは，性と家族と国家の密接な関係である。去勢不安（浜辺の思い出がきっかけとなってセクシリアに生じた症状としのニンフォマニアと光恐怖症と，リサの倒錯としての同性愛）はスペイン内乱であり，その克服（セクシリアとリサの恋）は民主化であり，そうして形成される幼児と両親の関係，自体愛から異性愛への移行（正常なカップルの形成）は，新しい国家の誕生を祝福する。

このように『セクシリア』でアルモドバルは，主人公たちの性と家族をめぐる物語によって幼児の性，すなわち，トラウマ的な状況の中で自身の性を決定し，両親との関係を構築していく幼児を描き，これをスペインの国家や国民と重ね合わせる。そしてそうすることでアルモドバルは，スペインの民主化と，未だ不安定な当時の政治状況を切り開く力として，性と家族を高らかに謳いあげたのである。

結びに

以上，本稿は，本作に見られる登場人物の倒錯に注目することで，本作でアルモドバルが愛，とりわけ性愛に，スペイン再生の力という役割を与えていることを確認した。そしてここまでの考察から，脇役ケティへの実父によるレイプがフロイトの理論を修正するものであることが見えてくる。

劇中，セクシリアは実家を出る計画を立てているらしく，ケティはセクシリアの身代わりになるべく，整形手術でセクシリアそっくりになる。ここで「不

気味なもの」の『砂男』の分析において，フロイトがナタナエルの父と砂男がそれぞれ父の異なる側面を表象するものと考えることにならい，ケティがセクシリアの分身であり，同じ女児を表象していると考えてみよう。

二日おきに父親からレイプされていたケティは，セクシリアの顔に整形した後，セクシリアの父と結ばれる。もちろん，ケティがセクシリアの父と結ばれるのは，物語上，近親相姦ではない。しかし，そこに映されるのは見た目には近親相姦でしかなく，両者の満足そうな表情から，ここには女児のエディプス・コンプレクスの願望が認められる。そしてそうだとすれば，ケティが実父から受けていたレイプは，女児の欲望の自発性を巧妙に隠蔽するものということになる。だが，たとえ比喩だとしても，実の父からのレイプをそのように理解してよいのだろうか。

この問題はまさにフロイトに当てはまる。フロイトは患者から近親の男性に誘惑されたという告白を受けたとき，最初，早すぎる性体験がヒステリーの原因だと考えた。これを「誘惑説」という。だが，フロイトは最終的にそれを幼児の欲望の表象だと考えを変える。こうしてフロイトはエディプス・コンプレクスを発見する。だが，当然ながらそれは父から娘への性的虐待を見逃すことでもある。

しかし，女児の倒錯と父によるレイプがセクシリアとケティで描かれることで，本作はエディプス・コンプレクスの理論と誘惑説の両方の可能性を提示している。いわば，セクシリアとケティはその姿かたちだけでなく，フロイトの理論においても鏡像[15]のようである。そしてこのセクシリアとケティの鏡像関係によって，フロイトが誘惑説からエディプス・コンプレクスに理論を変えたのとは逆に，我々はその目をエディプス・コンプレクスから誘惑説に向けることができるようになる。

父の誘惑。このテーマもまたスペインの人々にとってフランコの独裁を連想させるだろう。ケティが父による二日おきのレイプを嫌がっていたことは，スペインの人々がフランコ体制を嫌がっていたことを意味し，整形手術に向かう途中のタクシーでケティがセクシリアに「レイプに慣れてしまった」と言うのは，スペインの人々がフランコ体制に麻痺してしまったことを意味する。つまり，本作においてケティはスペインの歴史的悲劇を象徴している。しかし，そんなケティ=スペインの人々を救うのも愛である[16]。ケティはセクシリアの姿になることで，父の支配から逃れ，セクシリアの父と愛し合う。これは愛がケ

ティと彼女の父の近親相姦に終止符を打ち，ケティの性を正常化したことを意味している。とすれば，ここでも愛はスペインがその困難を乗り越える力として描かれている[17]。

註

1 フロイトにとって正常と倒錯が対立するものではないことを示すものとして「性理論三篇」（1905）の以下の記述を挙げる。「精神分析の研究は，同性愛者Homosexualを特異な一群として他のひとびとから区別しようとするような試みとは，はっきりと異なっている。この研究は顕性のものであると宣告された性的興奮以外のものを研究することによって，すべての人間は同性を対象として選択する能力があり，またこのような選択は無意識のうちにおいてもなされているものであることを明らかにする。それどころか，リビドー的感情が同性の人物と結びついていることは，正常な性生活にふくまれる要因として少なからぬ役割を果たしており，また発病の動因としては異性に対する結びつきが果たすよりは大きな役割を果たしているのである。そればかりではなく，対象選択が対象の性とは関係のないこと，男性の対象でも女性の対象でも同じように自由にできるということ，これは小児期においても，原始的な状態や前史的時代にも見出されるものだが，精神分析学にとってはこういうものこそ根源的なものなのであって，ここから制約しだいで一方へ向かえば正常型が，他方へ向かえば性対象倒錯型がというように，どちらかに発達してゆくものだと思われる。精神分析学の意味ではしたがって，男性の関心がもっぱら女性にだけ向けられるということは解明を必要とする問題であり，化学的な牽引力がその根をなしているというような自明のものではない。最終的な性的行為の決定はようやく思春期以後になってからのことであって，一部は体質的な，一部は偶然的な性質をもつ，容易にはみとおすことのできないほど多数の要因の成果なのである」（「性欲論三篇」『フロイト著作集 5 』懸田克躬，高橋義孝他訳，人文書院，1969年，16頁）。

2 このシーンに見る二人の関係はアルモドバルの最新作『パラレル・マザーズ』（*Madores Paraellas*，2021）のジャニスとアナに繰り返されているように思われる。なお『パラレル・マザーズ』の精神分析的解釈については拙稿「『パラレル・マザーズ』の精神分析的解釈の試み」（『日本映画学会会報』67号，2022年）を参照。

3 本作において精神分析により記憶を思い出したことで主人公の光恐怖症が治癒することは，アルモドバル作品でヒッチコック（Alfred Hitchcock，1899-1980）が何度も引用されることから，『セクシリア』の下敷きになった作品に『白い恐怖』（*Spellbound*, 1945）があったと思われる。この『白い恐怖』には，主人公の精神分析家コンスタンスの師匠のブルロフが，彼女が愛する記憶喪失者J.B.の症状を「光恐怖症」と診断する場面がある。おそらくアルモドバルはこれを参考にして，セクシリアの症状として光恐怖症を選んだと思われる。

4 「単純な場合，男児では次のように形成されていく。非常に幼い時期に，母にたいする対象備給がはじまり，対象備給は哺乳を出発点とし，依存型の対象選択の原型を示す一方（『ナルシシズム入門』参照・訳者），男児は同一視によって父をわがものにする。この二つの関係はしばらく並存するが，のちに母への性的願望がつよくなって，父がこの願望の妨害者であることをみとめるにおよんで，エディプス・コンプレクスを生ずる（『集団心理学と自我の分析』第七章参照。）。ここで父との同一視は，敵意の調子をおびるようになり，母にたいする父の位置を占めるために，父を除外したいという願望にかわる。そのの

ち，父との関係はアンビヴァレントになる。最初から同一視の中にふくまれるアンビヴァレンツは顕著になったようにみえる。この父にたいするアンビヴァレントな態度と母を単なる愛情の対象として得ようとする努力が，男児のもつ単純で積極的なエディプス・コンプレクスの内容になるのである」（『自我とエス』（1923）『フロイト著作集 6 』井村恒郎，小此木啓吾他訳人文書院，1970年，279頁）。

5 女児のエディプス・コンプレクスについては，フロイトの以下の論文を参照。「女性同性愛の一ケースの発生史について」（1920）および「幼児期の性器体制（性欲論への補遺）」（1923）（『フロイト著作集11』高橋義孝，生松敬三他訳，人文書院,1984年），「解剖学的な性の差別の心的帰結の二, 三について」（1925）（『フロイト著作集 5 』），「女性の性愛について」（1931）（『フロイト著作集 5 』），「続・精神分析入門講義　第33講　女性的ということ」（1934）（『フロイト著作集 1 』懸田克躬，高橋義孝訳，人文書院,1971年）。

6 したがって,「自分が男か女か」という問いに答えることは，両親に依存して生きるしかない幼児にとって命がけの行為である。これがいったん形成された性自認の変更が容易ではない理由だと思われる。性が本能的なものや自然なものではなく，子が両親との関係の中で形成していく文化的なものであるとしても，命がけでそれを選んだ以上，洋服を変えるようには変更できないのである。

7 広義では倒錯は正常から逸脱を意味する。狭義では倒錯は去勢の現実性に直面した幼児が，それに対処することである。抑圧が去勢の現実性を認めるのに対し，倒錯はそれを否認する。

8 否認とは出来事の意味を無意識のうちに拒む防衛機制のこと。

9 たとえばそれ自体は倒錯ではない否認の一つに隠蔽記憶がある。有名な「狼男」の症例でこれを確認しよう（「ある五歳児の恐怖症の分析」（1905），『フロイト著作集 5 』）。両親の性交を見た狼男は初めそれが何かはわからない。しかし，そのそれを去勢の現場と理解すると，狼男に去勢不安が生じ，自分が見たことを隠蔽するために自分が目撃した情景とおとぎ話を組み合わせ，木に登った数匹の狼が彼を見つめているという幻覚を作り上げる。こうして狼男はこの幻覚に悩まされるようになる。だが，この幻覚のおかげで去勢の現実性の受け絵入れを回避することができたのである。

10 このようなフェティシズムの理解に従うなら，鏡像段階において幼児が鏡像に同一化することにも，否認の機制を認めることができる。ここでは幼児は母の欲望の対象（=母に欠けたペニス）としての鏡像に同一化することで自身を母に差し出し，これにより母にペニスがないことを否認している。そして倒錯が去勢の現実を受け入れることの困難と関わるとすれば，すでに去勢されている女性に比べ，守るべきペニスを持つ男性に倒錯が多いこともわかるだろう。去勢されることを怯え，それゆえ母が去勢されていることをなかなか認めることができない男児は，去勢を受け入れてエディプス・コンプレクスを抑圧する代わりに，倒錯によって去勢を否認してエディプス・コンプレクスを維持する。しかしすでに去勢されている女児は，そのことに劣等感を抱いても，去勢不安を覚えることはない。女児にとって去勢は男児のように倒錯によって否認するものでも，抑圧により克服ものでもなく，初めから現実としてある。

11「いまや青年たる彼が愛している少年たちとは実は，かつて子供の彼を母が愛したごとくに，いま彼がそんなふうに愛している」（「レオナルド・ダ・ヴィンチの幼年期のある思い出」（1910)『フロイト著作集 3 』高橋義孝他訳，人文書院，1969年，118頁）。

「男性の同性愛の発生は，大まかに述べてみると，次のようになる。若い男はエディプス・コンプレクスの意味で，彼の母親に長いあいだつよく固着している。けれども思春期が完了したのち，ついに母親を他の性的対象と取りかえる時期がくる。そのさい，突然の

方向転換が起こる。若者は母親を捨てないで自分を母親と同一視して，彼女の中に自分を転化し，いまや彼の自我の代理となるような対象を求め，その対象を彼が母親から経験したように愛し世話するのである」（「集団心理学と自我の分析」（1921）『フロイト著作集6』，224頁）。

「同性愛。同性愛の器質的要因を認めたとしても，同性愛が成りたつときの心理的な過程を研究する努めをまぬがれたことにはならない。すでに無数の症例で確認された定型的な過程はこうである。これまで固く母親にむすばれていた青年が，思春期をすぎて二，三年後に方向転換をして母親と自分を同一視し，そして愛の対象をさがし求めるが，その対象のうちに自分を再発見し，かつて母親が彼を愛したようにその対象を愛するようになる，ということである。この過程の特徴として，彼が方向転換した年頃とおなじ年頃の男性の対象をもつことになる。この愛の条件がふつうは長い年月つづく。こういう結果になるには，さまざまな要因があって，それがいろいろな強さで作用することが分かっている。まず最初に母への固着があって，これが他の女性対象へ移りゆくのを妨げる。母親との同一視は，母親との対象結合の終末であるとともに，この最初の対象にたいしてある意味で忠誠をまもることを可能にしている。ついで自己愛的な対象選択の傾向がくるが，これは一般に異性へ向きを変えるよりは手近であるし実現もしやすい。こうなる契機の背後には他のもっと強力なものが隠れているか，または重複している。それは男性の性器をたかく評価することであり，愛の対象にそれのないことをあきらめられないことである。女性の軽視，女性にたいする嫌悪，さらに女性にたいする憎悪も，女性はペニスをもたないという幼時に見つけた発見につながるものである。後になってわれわれは，同性愛的な対象選択の有力な動機として，父への配慮や父にたいする不安があるのを知った。女性への愛をあきらめることは，父（または彼が出会うすべての男性）との競争を避けるという意味があるからである。ペニスがあるという条件の固執と男との競争の回避と，この二つの動機は去勢コンプレクスにかぞえられよう。母との結合――自己愛――去勢不安，このなんら特別なことのない契機を，これまでわれわれは同性愛の心理的な病因のうちに見出してきたが，これに加えてリビドーの早期の固着をもたらす誘惑の影響があり，また愛情生活において受身の役割を助長する器質的な要因もある」（「嫉妬パラノイア，同性愛に関する二, 三の神経症的機制について」（1922）『フロイト著作集6』，260-261頁）。

12「すなわち，単純なエディプス・コンプレクスは一般に，ひんぱんに現われるものではなく，かえって単純化あるいは図式化した結果であるという印象をうける。もちろん，それは実際的には正当なのであるが，より詳細に研究すると，多くはいっそう完全なエディプス・コンプレクスがはっきりしてくる。陽性と陰性の二重のコンプレクスであって，子供の根源的な両性的素質にもとづいている。すなわち，男児は父にたいするアンビヴァレントな態度と母にたいする愛情の対象選択をもつだけでなく，同時に女児のようにふるまい，父にたいして愛情ある女性的態度を，母にたいしては女性的な嫉妬ぶかい敵対的態度を示す。（「自我とエス」『フロイト著作集6』，280頁）。

13「不気味なもの」（1919）『フロイト著作集3』，336頁，および『E・T・Aホフマン「砂男」S・フロイト「不気味なもの」』種村季弘訳，河出書房新社，1995年，11-12頁参照。

14また，セクシリアがトラヤに砂をかけられ，リサから引き離されることに『砂男』のフロイトの解釈をそのまま当てはめ，これを父により男児が母から引き離されることとして理解することもできるかもしれない。この場合，セクシリアは男児であり，リサは母であり，トラヤは父親であるということになる。そしてそうだとすると，トラヤがマドリッドのハッテン場にリサを探しに行くとき男装しているように，劇中でトラヤの性が曖昧に表現されている理由の一つはここにある。おそらくトラヤは父と母の両方を「圧縮」して表

現しているのだろう（condensation）。論文本文でしたように，セクシリアを中心にした分析においてセクシリアを女児，トラヤを母親とすれば，トラヤによるセクシリアへの目潰しは，母が娘を劣った者として生むことの比喩と考えられる。したがってこのシーンは，前エディプス期において男児も女児も母を欲望し，男児はペニス，女児はクリトリスに特別な意味を与えること，そして解剖学的性差の認識や父の出現によって去勢コンプレクス（男児は去勢不安，女児はペニス羨望）が発生することを表しているのである。

15 ここでいう鏡像関係とは，鏡像が姿かたちは一見同じであるが左右は反転しているように，よく似たものと真逆ものを同時に持つ関係のことをいう。

16 おそらくアルモドバル映画においてレイプはスペイン内乱やフランコを意味し，したがってレイプされる女性はスペインを意味している（拙稿「『パラレル・マザーズ』の精神分析的解釈の試み』」参照）。

17 このことはケティの父にもあてはまる。妻が家出したことにショックを受けておかしくなったケティの父は，娘を妻と間違えて犯し，劇終盤で妻と依りを戻す。ここに母が父に欲望を向けること（妻の不倫），それにより男児がエディプス的欲望を抱くこと（娘との近親相姦），そして思春期の青年が母に似た女性を愛すること（妻の帰宅）を認めるなら，フランコのメタファーとしての狂った父性を鎮めるのも愛ということになる。なお，ラカンは精神病（統合失調症）の原因を「父の名」の排除と考えた。この「父の名」の排除とは父の世界を拒否することであり，したがって母の世界への回帰なのだから，ケティの父の偏執狂はまさに父の名の排除による精神病である。